

知っておきたい

法事のこと

残された人が
絆を実感する
機会でもあります

法事について、なんとなくは知っているけれど詳しくは...という人も多いかもしれませんね。基本的な知識や主催者になったときに心がけたいポイントなどを、1級葬祭ディレクターの九谷田(くた)拓司さんに教えてもらいました。

※記事の内容は、宗派・宗旨などにより異なる場合もあります

「法事」「法要」の
違いは？

『法要』は、『追善(ついでん)供養(くわう)』(下記参照)のことで、故人を供養するために僧侶にお経をあげてもらい、皆で冥福を祈ることを指します。一般的には、『法要』とその後の会食なども含めて『法事』と呼びます

「追善法要」とは

人は死んだ後に生まれ変わり、来世の幸・不幸は生前の行いで決まるといのが仏教の教え。でも、亡くなった人は、もうこの世で善行を積むことができないため、遺族が代わって仏様の供養をし、故人の善行にプラスしてもらえるよう祈る行為が「追善」です。

故人の極楽浄土への往生をお願いできるのは、初七日から四十九日の間の7日ごとのみとされ、このときの法要が「追善法要」と呼ばれます。

法事で
心がけたいことは？

「例えば、普段は離れて暮らす息子さんや喪主の場合、自分は面識がないからと、親戚や故人の友人を招かないこともあるそうです。もちろん、やむを得ないケースもあるでしょうが、生前の親の人間関係が分らないとか、高齢者が招くのに遠慮がある、というのが理由なら、そこは少しがんばって案内してみられては、と思います。故人と親しかった友人が訪れることで、会場の空気が変わること、多少なくありません。法事は故人の成仏を祈るためのものですが、残された人同士が思い出を語り、その絆を確認できるきっかけにもなります。そこを意識すれば、一層和やかで、貴重なひとときとなるはずですよ」

法事を行う時期は？

「四十九日または五七日で忌明けした後、法事は、一周忌や三回忌などの年忌法要(表参照)に行われます。

法事は、一般的には故人の葬儀の喪主を務めた人が主催します。

時期は、命日の1週間前が望ましいとされますが、曜日(の都合などで)皆が集まりやすい日を選ぶこともあります。その場合は、命日を過ぎて行うのはしきたりに反します。日にちは前倒しに。

ちなみに日程や内容なども、喪主が主導で決定しますが、親族の年配の方の意見を尊重されることも多いです」

法要の種類(仏式の場合)

忌日法要	初七日(しょなのか)	亡くなった日から数えて7日目
	二七日(ふたなのか)	14日目
	三七日(みなのか)	21日目
	四七日(よなのか)	28日目
	五七日(いつなのか)	35日目
	六七日(むなのか)	42日目
年忌法要	四十九日(しじゅうくにち) ※満中陰(まんちゅういん)ともいう	49日目
	百か日(ひゃっかにち)	亡くなってから100日目
	一周忌(いっしゅうき)	亡くなってから満1年目
	三回忌(さんかいき)	満2年目(ここから亡くなった年を含めて数える)
	七回忌(ななかいき) ※以後、十三回忌、十七回忌、二十一回忌、二十五回忌、二十九回忌、三十三回忌、三十七回忌、五十回忌と続きます。三十三回忌までで終わるのが一般的ですが、なかには五十回忌まで行う人も	満6年目

教えてくれた人

1級葬祭ディレクター
九谷田(くた)拓司さん

最近はおく内輪で行う「家族葬」が増えていることに象徴されるように、法事も簡素化が進んでいるように感じます。一見、煩わしそうに見えても、先祖から伝わり、これまで皆がしてきたことを自分も行い、次の世代につなぐのは大切なことではないでしょうか。

